Osaka University Knowledge Archive

Title	認知症専門病棟におけるnighttime movementに関するスタッフの日常的観察記録の正確性とアセスメントへの応用 : ICタグモニタリングシステムによる客観的データとの比較
Author(s)	山川, みやえ
Citation	大阪大学, 2012, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58953
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【９】

氏　　名	山　川　みやえ（やま　かわ）
博士の専攻分野の名称	博　士（看護学）
学 位 記 番 号	第　２５５５４　号
学位授与年月日	平成24年３月22日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 医学系研究科保健学専攻
学 位 論 文 名	**認知症専門病棟におけるnighttime movementに関するスタッフの日常的観察記録の正確性とアセスメントへの応用：ＩＣタグモニタリングシステムによる客観的データとの比較**
論 文 審 査 委 員	（主査） 教　授　牧本　清子 （副査） 教　授　三上　　洋　　教　授　早川　和生

論 文 内 容 の 要 旨

背景：入院中の認知症患者の夜間徘徊に対しては薬物治療と非薬物治療が広く実施されている。それらの治療の評価方法としては、アクチグラフやそのほかの睡眠や徘徊に関するスケールが用いられている。しかしながら、臨床実践では、夜間の徘徊についての看護記録が唯一の日常的な観察の情報源となっている。したがって、医師は薬物治療や非薬物治療の評価をするには、看護記録に依るところが多い。

目的：本研究は、ICタグモニタリングシステムを用い、認知症患者の入院後の夜間の歩行を継続的にモニタリングした。その結果を病棟スタッフによる直接観察により収集した情報と比較し、一致率を算出した。スタッフの夜間における患者の観察の傾向を探索した。さらに認知症患者の夜間の活動を、ICタグモニタリングシステムによる詳細な客観的データによってスタッフにフィードバックし、そのデータとスタッフの患者の印象との差についてのスタッフの認識を明らかにした。

①ICタグモニタリングシステムとスタッフの観察における一致率

方法：

データ収集：本研究は2008年から2009年にA総合病院の老人性認知症専門治療病棟で実施した研究プロジェクトの１つである。

分析対象者：新規入院患者で、独歩が可能な者とした。

データ収集項目：年齢、性別、認知症診断名、ADLレベル、入院理由等の人口学的データ、ICタグモニタリングシステムによる夜間の歩行回数、スタッフによる夜間の直接観察

ICタグモニタリングシステム：病棟内の天井裏にICタグを受信するためのアンテナを設置し(各病室の入り口、トイレ等30箇所)、患者の衣服にICタグを装着した。ICタグを装着した患者が、アンテナの下を通ると、その時間と場所の情報が自動的にコンピューターに蓄積される。このシステムにより患者の歩行場所や歩行回数を表すことができた。各部屋の入口にアンテナを設置しているため、夜間にICタグモニタリングシステムで一度でも感

知されると患者がその時間に歩行しているとされる。スタッフによる直接観察の実際：病棟の勤務体制は3交代制で、深夜帯（0:00-9:00）はスタッフ2名で対応していた。深夜帯の勤務内容は、夜間（0:00-5:00）に1時間毎に病棟内をラウンドし、覚醒者を記録していた。

分析方法：夜間（0:00-5:00）の活動について、ICタグモニタリングシステムによる夜間の患者の歩行とスタッフの直接観察の一致率を算出した。一致率とは、ICタグモニタリングシステムで患者の歩行が感知された時間にスタッフの直接観察による記録があった割合のことである。

倫理的配慮：本研究は大阪大学保健学倫理委員会及びA病院の医学研究倫理委員会の承認を得て実施した。研究参加要請時は、患者の意思決定代理人が、研究内容についての説明を受け同意書に署名した上で参加した。

結果：モニタリング期間は7ヶ月で36人をモニターした。対象者の10-30%に夜間の歩行がみられた。全期間中の一致率は39%であった。一致率は歩行距離interquartile値と相関があり、日中における薬を変更したとき、身体症状のあるとき、精神症状のあるときに高い傾向があった。

結論：夜間の患者の歩行とスタッフの直接観察の記録との一致率は低かった。しかし、スタッフは患者の行動に変化がありそうなとき（薬を変更したとき、身体症状のあるとき、精神症状のあるとき）は注意深く観察していることがわかった。

②ICタグモニタリングシステムによる客観的データのスタッフへのフィードバック

方法

データ収集：スタッフへのデータのフィードバックは2008年10月～7ヶ月間実施したインタビューは2008年12月～2009年4月に実施した。

データ収集方法： ICタグによる患者の夜間の活動を病棟カンファレンスで紹介した後、同意を得られたスタッフに個別インタビューを半構成的面接法で実施した。

分析方法：録音されたインタビュー内容を逐語録にし、ICタグによるデータと患者への印象との差の有無、及びその理由についての内容をまとめ、類似した内容を整理した。

倫理的配慮： 本研究は大阪大学及び当該病院の医学倫理委員会の承認を得て実施した。スタッフには研究内容について文書と口頭で説明し、署名によって同意した者のみを研究参加者とした。

結果：研究参加者は15人であった。15人のうち11人のスタッフはICタグによる客観的データと自分の患者への印象が異なる患者がいたとのことだった。印象と違う理由として、「精神症状が激しい者は夜中の活動性も高いと思っていた。」「日中穏やかに過ごしている患者は夜間もそうだと思っていた。」「意思疎通の取れる患者は観察の優先順位は低かった。」ということがあげられた。

結論：本研究は、ICタグによる量的なデータを用いて、夜間の患者の印象についてのスタッフの偏りを質的データとして引き出した。精神症状やADLレベルなどの患者の特性によって観察する優先順位やスタッフの患者への印象に偏りがあることが示唆された。今後はさらに見落としやすい患者の特徴などを詳細に検討していくことが必要である。

論文審査の結果の要旨

【論文の概要】

入院中の認知症患者の夜間徘徊に対しては薬物治療と非薬物治療が広く実施されている。それらの治療の評価方法としては、アクチグラフやそのほかの睡眠や徘徊に関するスケールが用いられている。しかしながら、臨床実践では、夜間の徘徊についての看護記録が唯一の日常的な観察の情報源となっている。したがって、医師は薬物治療や非薬物治療の評価をするには、看護記録に依るところが多い。

本研究では、認知症専門治療病棟に入院中の認知症患者を、ICタグモニタリングシステムを用いて、長期間モニタリングし、nighttime movementを客観的な指標で記述した。そして、ICタグモニタリングシステムで測定したnighttime movementと日常的に記録されているスタッフの観察記録におけるnighttime movementとの1時間帯毎の一致率を算出し、nighttime movementがどの程度観察記録に反映できているかを検証することができた。さらに、当該病棟に従事するスタッフに対してICタグモニタリングデータをスタッフカンファレンスでフィードバックし、個別インタビューを実施した。その結果、nighttime movementに関するICタグモニタリングデータとスタッフの認識との違いに関してスタッフと共に振り返り、その原因を明らかにすることができた。

【審査結果の要旨】

本研究は、認知症患者のケアに携わるスタッフの記録の正確性を向上しようという取り組みで、ICタグモニタリングシステムを用いて、長期間モニタリングし、nighttime movementに関する量的・質的データを丁寧に分析した研究である。その結果、nighttime movementに関するICタグモニタリングデータとスタッフの認識との違いに関してスタッフと共に振り返り、その原因を明らかにすることができた。

本研究は臨床的示唆に富むところが多く、即時的な臨床応用への可能性も大きい。臨床実践でのケアの精度を高める試みとして期待される研究といえる。

以上のことにより、本論文は博士（看護学）の学位授与に値するものと考えられる。